

## 金谷 治編『思想史』書評

北 村 学

西洋哲学が、いわゆる「哲学」として輸入され、これにならって、「中国（支那）哲学」なる名称が多く用いられてきた。この種のものを扱った書物で、「思想」という名を使ったのは、武内義雄氏の「支那思想史」に始まるようであるが、本書でも、それにならって「思想史」と名づける。

もともと、西洋哲学ふうの「認識論」が光をあびると、それと方向の異なる——「倫理」を基調として、「実践」に回帰する、中国のものは、そうした意味合いでは、「思想」の名をもってするのが、ふさわしいといえよう。

さて、金谷氏は「総論」に、  
思想史学は実証科学としてあくまで対象に即したものであることを必要とするが、同時にまたその対象の意味するところを理解し、あるいは解釈することによって、思想の内的関連を科学的な確か

さで証明しなければならない。  
と、「思想史」の方法を述べる。

次に、日本と中国における、従来の書物の内容を批判する。

遠藤隆吉著「支那哲学史」、狩野直喜著「中国哲学史」、胡適著「中国哲学史大綱」、馮友蘭著「中国哲学史」、武内義雄著「中国思想史」などが、とりあげられる。

さらに、唯物史観による、呂振羽の「中国政治思想史」、侯外廬らの「中国思想通史」等の、新しい方向にもふれる。

ついで、時代区分の問題について、いう。

思想史の時代区分としては、思想自体の動きと変化を中心としてそれを設定する必要がある。（中略）時代を画するには、思想としてのそれだけのまとまりが次の時代のものとはっきり違った特色を備えて明らかにされねばならない。

と。

かくて、本書では、春秋戦国から漢初までを「古代」、漢唐は「一まとまり」として、漢の武帝の思想統一以後——唐代の思想界も、漢代と比べてその内容を量的に広げたけれども、その思考態度や思想そのものは変わりなく、閉鎖的な中世的なものであったとして、これを「中世」、

漢唐の思想を否定して、直接に孔子の真精神の復活を求めた宋以後の思想界は不完全ながらも近世的な様相として、「近世」、  
經典の權威が根本的な動揺を見せて急速な崩壊への道をたどる清末アヘン戦争以後を「近代」、  
とする。

以上の区分に従って、渡辺卓氏が「古代の思想」を、日原利国、高田淳、荒木見悟の三氏が「中世の思想」を、儒教、道教、仏教の分野でなめる。

「近世の思想」は、友枝竜太郎、山下竜二、佐藤震三、三氏が執筆、「近代の思想」は、後藤基巳、山口一郎、両氏が分担する。  
いま「近世」に関する項目を摘記すれば、

#### 総説

伝統思想への反省

宋学の展開

宋学の集大成

心学の出現

心学の展開

政治への関心

政治変革の理論

世界観の転換—気の哲学の展開

花開く古典学—經典研究への執念

伝統思想の誇りと悩み—公羊学派と変法思想

「近代」では、

清末時代

西洋思想の流入

民族の自覚

民国時代

文化革命と近代思想の展開

社会主義思潮の発展と反動

三民主義と国民革命

伝統思想の復活

新民主主義革命と毛沢東思想

となっていて、本書での扱いが、端的にあらわれている。

巻末には、有田和夫氏の「中国思想史年表」（前一七五〇—一九六五）を付し、次に「参考文献」、最後に、人名・事項を中心の「索引」がある。

「中国思想史」研究の、現段階を概観するのに役立つ好著である。

金谷治他編集『思想史』（「中国文化叢書」3）昭和42年10月20

日・大修館書店・三七〇頁・一一〇〇円

編集・寄稿者・金谷治氏は、本学専門部国語漢文学科昭和16年卒業、東北大学文学部卒業。現職・東北大学文学部（中国哲学）教授。文学博士。